

朗 読 文

あれは、早春のひりひりするような寒さが、まだ残っているある日のことでした。私は独りで、クヌギ林を歩いていました。

木の芽が出るには間のある季節で、固い膨らみがきゅっとしまったままで、枝ごとについていました。小さく固まった膨らみは緑色になりきれず、灰色にくすんでいました。

年を越した落ち葉は、金色の色もすっかりあせてしまつて、つやのない朽ち葉色になっていました。

冬山よりもわびしい早春のクヌギ林のひと時でした。

そういう林の中を歩いていた時、日だまりの間に、目にしみるような緑の葉が、古い落ち葉の間からちらっと見ええました。

落ち葉をかき分けてみたら、春ランの一株でした。

春ランはうすい肉色の花をつけていました。春ランは、かすかな、ほんとかすかなにおいを立てていました。

かすかなにおいでしたが、朽ち葉の中の、その一本の花のところから、春が、むくむくと湧き出てくるような気がしました。

どういうわけか、私は、急に嬉しくなっていました。火花がぱつと開いたように、ほんと、突然、私はむしろ嬉しくなってしまったのです。

それからのち何年かして、中学生になってからの頃でした。私は、町の古本屋で、あるロシアの作家の短編集を手に入れました。その本を読んでいたら、「無用の美」をたたえている文章にぶつかりました。「無用の美というのは、人間は、人間の損得に関係のない美しさで、例えば、山道でドングリの実をふと見つけたなど、なんとも言い知れぬ喜びを感じることもある。こういう美しさから、人間は、よく、うっとりするような喜びを感じるものである。こういう美しさを感じるということも人間の特権である」というような意味のことが書いてありました。

私は、その時、遙かに忘れていたクヌギ林のことをふと思い出したのです。

幼い日に無心感じていた、あの喜びのことを、この外国の作家は言っているのだと思うと、何かもやもやしていたものが、すうっと取り払われて、心の中が、日本晴れのように爽やかになっていくのを感じるのです。